
腕時計

咲蘭保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

腕時計

【Nコード】

N3572Y

【作者名】

咲蘭保

【あらすじ】

大切な姉を失った宮野志保。

そんな志保を守る工藤新一。

砂時計の話の名探偵コナンの新志風にした作品です。

新一と志保の切ない恋愛を書いています。

始めに（前書き）

名探偵コナンと砂時計のコラボ作品。

砂時計の登場人物に名探偵コナンの登場人物を当てはめてみました。

カップリングは主に新志です。

快志もあり。

始めに

設定

植草杏〓 宮野志保

北村大悟〓 工藤新一（蘭には江戸川コナンと灰原哀のことは言っていない）

月島藤〓 黒羽快斗（江古田高校から帝丹高校に転校・元怪盗キッド）

月島椎香〓 毛利蘭

杏の母親〓 宮野明美

杏の祖母〓 阿笠博士

榑崎歩〓 前本茜（オリキャラ）

最上茉莉子〓 中森青子

友達 A〓 鈴木園子

遠藤〓 本堂瑛佑

バイト先のおっちゃん〓 服部平次

パラレルというわけではありません。

・コミックをもとにして書くので台詞が多くなると思います。

・砂時計をもとにしていますが、登場人物の性格はほとんど名探偵

コナンのままです。

・無理やりな設定もあると思います。

以上の条件でも読んでみたいという方は1話から読んで見てくださ
い。

1話：19歳夏・神鳴

志保SIDE)

『俺が守ってやつから。』

組織を潰して一年半。宮野志保19歳、夏。

私と工藤くんは組織と決着がついたあと、完成した解毒剤を飲み、元の姿に戻った。

私たちの正体についてはいままで深くかわった人たちだけに話し、その後、私は転校生として帝丹高校へ通うことに。

転校初日に私は蘭さんに声をかけられ、友達になった。

工藤くんは元に戻ってから、蘭さんに告白することもなく、以前と同じように《幼馴染》の関係を続けていた。

二人は以前から恋人、などと噂されていたらしいが今ではそんな話を全くと言っていいほど聞かない。

私の知らない間に何かあったのだろうか、とも考えたが二人の關係に私が口出しするのもよくない、と思い私は何も聞かなかった。

志保「ねえ、工藤くんいる？」

そう言つて、私が声をかけたのはサッカー部のマネージャー前本茜だ。

工藤くんは復帰しても部活には入らなかったが、たまにサッカー部に顔を出す。

今日も朝から朝練に参加している。

こうして、工藤くんが朝から練習に参加するときは私が彼の分の弁当を作つて持つてくる。

茜「今、練習中よ。弁当なら私が渡しておくから。」

蘭さんと工藤くんの噂がなくなってから工藤くんにアピールする女子が増えだした。

どうやら彼女もそのうちの一人らしい。

志保「じゃあ、よろしくね。」

前本さんは私から大きな弁当箱を受け取り、笑顔で工藤くんにそれを持って行く。

志保（・・・はあ。）

思わずため息をついてしまった。正直言うと、私が渡したかった。でも、そんなこと私ができるわけがない。もう一度、はあ、とため息をつく。

そして、体をくるり、と回転させグラウンドを出ようとした。

そのときおーい、と少し離れたところから声がした。工藤くんだ。

彼は走って私のところに向かってきているのが見えた。

新一「志保、弁当サンキュー。」

志保「別に。私のついでだから。じゃあね。」

私は工藤くんに背を向けた。

すると、腕をギュッと掴まれ、彼と向かい合った。

新一「あのおさ」

彼は元の姿に戻り、手足にしっかりとした筋肉がついている。

手もゴツゴツとしていて

江戸川くんだったころより、男らしさが出ている。

私たちから少し離れたところで前本さんがこちらを睨んでいるのがわかる。

新一「聞いてるか？」

志保「え？」

新一「これ……。修学旅行の話だけど自由時間、蘭や快斗たちと一緒に回らねーか？」

志保「考えとくわ。それじゃ。」

私はそっけなく返事をし、再び工藤くんを背中を向ける。

そして、私が歩き始めたとき、次は肩をつかまれた。

私は思わず肩に置かれた手を払いのけてしまった。

新一（にやる。）

「俺、今日も目暮警部に呼び出し受けてるから蘭たちと勝手にコース決めといてくれ。」

志保「はいはい。」

.....

「うわー」

「山だ」「山ばっかだ」「高校生にもなって修学旅行が山なんて

な。小学生の遠足じゃあるまいし。」

クラスの男子たちは愚痴をこぼしている。

私の横でも1人、ブツブツ言っている人が。

新一「まったく、これじゃあ修学旅行つてよりキャンプじゃねーか。

今日だってテント張って寝るんだろ？」

志保「今更、何文句言ってるのよ。あなただってこういうの好きじゃない。

小学生のころはあなたもそれなりに楽しそうだったわ

よ。」

新一「うるせー。」

こうして二人並んで小声で話すのは小学生の頃と変わらない。

でも、この光景を遠くから睨んでいる人もいる。

私はその視線に気づいて自然と工藤くんから離れていく。

志保（はあ、面倒だわ。）

蘭「志保ちゃん、テント建てるよー。」

十五分ほどしてテントは建て終わった。

蘭「やっと終わったね。」

園子「でも、雨降りそうじゃない？」

志保「あ・・・降ってきたわ。」

最初はポツ、ポツと降っていた雨も次第に大雨になっていた。

遠くで、「テント片付けろー！キャビンに集合！」という先生の声が聞こえる。

園子「今、テント建てたばかりなのに。」
志保「仕方ないわね。」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

快斗SIDE)

『雨と雷がひどいので安全のため今夜は全員キャビンで寝ることになりました。』

順番にシャワーをあびて今夜はゆっくり休んでください。』

先生にそう言われて、生徒はみなキャビンに戻った。

俺の周りでは、部屋で寝れるからよかった、という人もいれば

せっかくキャンプ気分を楽しむつもりだったのに・・・と文句を言っているやつもいる。

少なくとも俺はあんなジメジメしたところでテントを張って寝るより、

部屋にふとんを敷いて、ゆっくりできるほうがいいと思う。

カッ！！ガラガラ

「うおっ」

「みっ見たか、今の！落ちたんじゃねーか？」

快斗（はあ、うるさい・・・寝られねーし。）

せっかく、ゆっくり寝れると思ったのに同じ部屋のやつらは大騒ぎ

してやがる。

俺はなんだかイライラしてきて、部屋を出た。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

志保SIDE↓

部屋にいても同じ部屋の子たちは恋の話で盛り上がっていた。当然私はそんな話に入っていけないわけもなく、

1人部屋を出て、廊下の窓の外の様子を眺めていた。

すると、男子部屋がある方から誰かが歩いてくる気配がした。

暗くて、最初は顔が見えなかったけど、

その人との距離が短くなるとその人物の正体が分かった。

志保「黒羽くん。どうしたの？」

快斗「？志保？いやー雷がうるさいし、へやのやつらもううるさいしで眠れなくて。」

志保「黒羽くんって雷苦手？」

快斗「苦手・・・なのかな。俺の親父が死んだ日、雷がすごくてさ。

それから雷がなるとよくそのときのこと思い出すんだ。

「
志保「そう。」

快斗「・・・知ってる？雷って元々は『神が鳴く』って書くんだぜ。

昔は『神様の仕業』って考えられていたらしい。」

志保「神様ねえ。」

昔、まだお姉ちゃんが生きてた頃、私は神様をお願いしたことがあった。

『お姉ちゃんを幸せにしてください』『私とお姉ちゃんを組織から助けてください』って。

志保（神様・・・）

そこで快斗があ、と声を漏らす。

快斗「やんできた。風も弱くなってきたし。・・・これなら行けるかな。」

志保「え？」

私は黒羽くんの後ろをついて行った。

靴を履いて外に出る。

先生達に見つからないよう静かに。

こういうところでは昔の経験が役に立つ。

黒羽くんは怪盗キツドの、私は組織だったときの・・・。

志保「ちょっと？どこ行くのよ。」

快斗「前にここに来た時見つけたんだ。今年は見れるか不安だったけどよかった。」

黒羽くんにつれてこられたところには小さな光がたくさん散らばっていた。

志保「蛭・・・。久しぶりにみたわ。」

快斗「ん？みたことあったのか。」

志保「ええ。灰原哀だったところに円谷くんが

私と吉田さんのために一人で探して見せてくれたのよ。

ほんと、綺麗よね。」

快斗「へー。今のオレとその小学生のそのときの気持ちは多分一緒だろっぜ。」

志保「？」

快斗「志保を喜ばせたっていう気持ち。」

黒羽くんはニツ、と笑った。

快斗「それより、今日はその腕時計してないんだな。」

志保「え？」

快斗「ほら、お姉さんの形見の。いつもつけてんのになんかつけてないから。」

私の大切な腕時計……。

あれは私と工藤くんがまだ小学生の姿で出会って間もないころ、工藤くんが私に渡してくれた。

『明美さんが亡くなったときにつけてた腕時計だ』って言うけど、私はいらないうつて言った。

お姉ちゃんのことを思い出したら泣きそうになるから。なのに彼は『大事に思ってた人だろ？大事に思ってた人のこと、無理に忘れようとするな。』

大事に想ってた気持ちを消そうとするんじゃない。……明美さんの分まで俺が守ってやつから。』

そう言うて渡してくれたあの腕時計。

あれから私は常につけていた。

今日は雨に濡れて壊れないようにカバンの中に入れた。

志保「カバンの中にあるわ。」
快斗「そっか。それじゃあ、そろそろ戻ろつか。先生に怒られるのも嫌だし。」

そして私達はキャビンへ帰っていった。

志保SIDE

志保（え？ない・・・たしかにココに入れたはずなのに）

私が帰ってきたとき部屋の中はまだ騒がしかった。

私は外から帰ってきてすぐにカバンの中を探した。

カバンの中身も全て出して探してみたが見当たらない。

そのとき、後ろから声をかけられた。

「宮野さんが探してるのってあの傷だらけの腕時計？」

振り返ると茜が軽く笑みを浮かべて立っていた。

志保「そうだけど、あなたどこにあるか知ってるの？」

茜「うん。知ってる。クスッ。」

志保「どこにあるの？」

茜「確か、あのテントを建てた辺りだったかな。落ちてたから大きな石の上に置いたわよ。」

志保「そう。」

私はそれだけ聞くと急いで外に飛び出した。

外は再び大雨で、遠くでは雷も鳴っている。

でも、今の私にそんなことどうでもよかった。

あのときの茜の意味ありげな表情も気にしなかった。

とにかく腕時計を見つげるためだけに走った。

茜が言っていた場所に着いた。

しかし、腕時計は見つからない。

志保（ない・・・どこにあるのよ・・・）

新一「あん？」

茜「腕時計を探しに行ったの。宮野さんは。」

新一「腕時計つて、もしかして……」

快斗「お姉さんのじゃねーか。カバンに入れてるって言うてたけど、さっきつけてなかったし。」

そこで茜はごめんなさい、と言って腕時計を出した。

新一「なんでオメーがこれを持ってんだ？」

茜「ち……違うの！！ちよつとからかおうと思っただけ……！」

あきらめて帰って来たらちゃんと返すつもりで……！」

新一「何でオメーが持つてるのかを聞いてんだ……！」

俺は冷静ではいらなかった。

アイツにもしものことがあったら、と思うとだまっぺいられなくて、この女の胸倉をつかんでアイツの居場所を聞きだし、外に出た。

大雨の中、傘もささず、ただひたすら走り続ける。

そんな時、俺の目に映ったのは暗闇のなかフラフラしながら草むら
を歩いているアイツだった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

志保SIDE)

志保(頭がクラクラする……)

もう限界だった。いくら夏とはいえ、雨に1時間以上も打たれ続けていたら体も冷える。

「志保!!」

どこかで声がするが辺りが暗くて何も見えない。

「志保!!」

志保「工藤くん・・・」

志保の目に声の主が映ったときにはその人物は志保を抱きしめていた。

新一「大丈夫か？」

志保「なんとか、ね・・・」

新一「オメー体冷えすぎだろ。」

志保「雨にぬれてるんだから、当たり前で、しょ。」

そう言った後、私の目の前は真っ暗になった。

.....

茜「宮野さん!!」・・・っ ごめんなさい・・・っ

目が覚めると前本さんがいて、腕時計を返してくれた。

私は前本さんからそれを受け取ってその時計をギュッ、と握りしめ

た。

志保「もう、いいわよ。ちゃんと返してくれたんだから。」

(よかった・・・、お姉ちゃん・・・)

.....

ガタンゴトン、ガタンゴトン・・・

ドサッ

志保「？そこ、蘭さんと園子さんの席なんだけど。」

新一「席かわつてもらった。」

志保「・・・そう。」

新一・志保「・・・」

新一「なあ、俺なんかしたか？」

志保「はあ？」

新一「お前ここんとこずっと超感じ悪かったし・・・いつもに増して。」

目を合わせてもすぐそらすし、ちょっと触れただけで人をバイキンみたいに。」

志保「はあ・・・あなたほんと鈍感ね。女子がそんなことするのって

意識してるから、とか考えないの？」

新一「意識してたのか？」

志保「さあね。今のは普通の女の子の場合。」

新一「オメーも普通の女子だろ。」

志保「自意識過剰。」

新一「なんだよ。かわいくねーな。俺は素直になろうとしてんの。」

志保「？意味がわからないわ。」

新一「そつだな。簡単に言つと、俺はお前が好き、ってことかな。」

志保「何言ってるのよ。ふざけないでくれる？」

新一「ふざけてねーよ。俺の本当の気持ち。」

俺は志保が俺のことどう思ってるか聞きたい。」

志保「・・・私は・・・」

思い出はいつもまぶしくて痛みと切なさを伴う19歳夏

初めてのキス

1話：19歳夏・神鳴（後書き）

砂時計1巻の後半の部分からのお話です。
台詞は新志風に改造してます。

2話：19歳秋・誰そ彼

志保SIDE)

「ずっと、ずっとずっとあなたのそばにいたい……
それだけが願いのはずだった。」

別れは突然やってくる。

志保「……イギリス？」

快斗「そう。世界を飛び回って親父みたいなマジシャンになるんだ。」

最初はイギリスで修行！」

志保「そう……。」

黒羽くんがいなくなる。

組織を抜けてから、何度か私や工藤くんを助けてくれた。

組織との戦いのときもあの白い怪盗の姿と一緒に戦ってくれた。

黒羽くんがいてくれたから私たちは今も生きていられる。

.....

新一「ああ、快斗のこと？イギリスに行くって言ってたな。俺も昨日聞いた。」

志保「ほんと、黒羽くんの言うことはいつも急よね……。」

新一「ま、でも仕方ねーよ。親父さんの仇を討って、やっと自分の夢を叶えようとしてんだ。」

いつまでも組織のことばかり気にしてられねーよ。」

志保「・・・そうね。黒羽くんには感謝しないとイケないわね。」

時間はゆっくりと、けれど確実に私達の関係を変えてゆく
このまま時間をくい止めたい。それでも変化は突然訪れる

志保「ただいま、博士。」

博士「お帰り、二人とも。そうじゃ、志保くん。お客さんがみえて
おるぞ。」

志保・新一「お客さん？」

靴を脱ぎ、阿笠邸のリビングに三人並んで入っていく。
リビングに入った先で工藤くんと私の目に入ったのは
私と同じような色の髪のお婦だった。
手にしていたマグカップを机に置き、こちらを見る。

新一「あの・・・」

志保「お、ばあちゃん・・・」

新一「え？」

老婦「志保。久しぶりね。」

私は覚えていた。

この声、この笑顔、この優しい雰囲気。
私が大好きだった祖母だ。

志保「おばあちゃん・・・よね？」

私がそう問うと何も言わずに優しく微笑んだ。
この表情はどこか私のお母さんに似ていた。

老婦「大きくなったわね。」

おばあちゃんはそう言って私の頭をなでてくれた。
こうやってなでてくれるこの手も、私は大好きだった。

両親がまだ生きていたころ、私とお姉ちゃんはよくおばあちゃんの
家に行っていた。
だけど、私が組織に入れられておばあちゃんと会う機会はなくなっ
た。

両親もお姉ちゃんも、おばあちゃんの話はしなくなった。
それから、両親が死に、組織が人を殺している場面もよく見るよう
になった。

そして、思った。おばあちゃんも死んだんだ、と。

でも、今、ずっと死んだと思っていたおばあちゃんが私の頭をなで
ている。

志保「おばあちゃん・・・」

老婦「よかったわ。また会えて。」

そこに、ずっと私の横に立ってこの様子を見ていた工藤君が疑問を
口にした。

新一「あの、あなたは・・・」

すると、おばあちゃんは私の頭から手を離し、先ほど座っていたソ

フアに腰をおろした。
工藤くんと私もそれに続く。

「私は志保の祖母のマリーと言います。

何日か前にFBIの方たちが私の家に来て、志保のことを聞きました。

そして、一目志保を見たくてこうして来たのです。」

FBIが家に来て私のことを聞いたなら組織のことも知っているだろう。

お父さんやお母さん、お姉ちゃんが死んだことも。

まさか、血の繋がった家族がこの世にいたなんて思わなかった。まして、おばあちゃんに会えるなんて考えもしなかった。

その後もいろいろと話をし、おばあちゃんは一週間ほど阿笠邸に滞在することになった。

.....

志保「おばあちゃんは、寂しかったでしょうね。」

新一「ん？」

翌日。

学校からの帰り道。私は工藤くんと二人で帰っていた。

志保「おばあちゃんは、おじいちゃんが死んで、お父さん、お母さん、お姉ちゃんが死んで

ずっと、一人で寂しかったでしょうね。」

新一「迷ってんのか？おばあさんとイギリスで暮らすかどうか。」
志保「迷ってない。私はここに残る。食事を作る人がいなかったら
博士、今よりもっとメタボになるわ。」

それに、解毒剤を服用した工藤くんの身に何が起こる
かもわからないし。」

本当はそんな理由じゃない。ただ、工藤くと離れたくないだけ。
本当に本気でそう思うのに

新一「俺も博士も大丈夫だ。俺は何回も志保の検査を受けたけど何
の異常もねーし、

博士のことはちゃんと俺が看ておく。

でも、志保がここを離れられない理由はそれだけじゃ
ねーんだろ？」

志保「……」

新一「心配すんな。」

俺は離れてても気持ちは変わることなんてないから。

それにどうしても会いたい時は会いにいける。

だから、行ってこい。」

志保「工藤くん……私、工藤くと一緒にいたい。ずっとずっと。

でも……」

新一「いいよ。俺はいつまでも待つから。」

ちゃんと、俺が一人で稼いで暮らせるようになったら
ちゃんと迎えに行っから。な？」

志保「……わかったわ。私、イギリスに行ってくる。」

「博士、おばあちゃん。私、・・・」

『工藤くんが迎えにきてくれるまで』

そう心に決めて、私はおばあちゃんとイギリスで暮らすことにした。

.....

蘭「どうして!?!どうして志保ちゃんも行くの?」

園子「快斗くんのせいよ!!!」

快斗「なんでだよ。」

私は今、両手に大きな荷物を抱えて空港にいる。

見送りに来てくれた蘭さん、園子さんには私がイギリスに行く、と決めた翌日に話した。

それからずっとこの調子で私を日本に残るよう説得してくるのだ。

私が急遽、おばあちゃんと一緒にイギリスへ行くこと決めたのは

蘭さんや園子さんの説得に乗ってしまったわないうようにするためだ。

今でも、こうやって説得されたら決心が鈍ってしまいそうになる。

でも

永遠の別れじゃない。気持ち離れるわけじゃない。

博士「志保くん、元気だな。無理はするんじゃないぞ。」

志保「わかってるわよ。人のこと心配する前にまずは自分の心配をしてほしいわ。」

.....

快斗「何で止めねーの？余裕？それとも意気地がねえの？」

新一「・・・どっちでもねーよ。」

快斗「・・・本当はケジメのつもりだったんだ。俺なりの。」

きっぱり諦めるつもりでイギリス行き決めただ。で

も・・・」

新一「おい！《誰を》だよ。《でも》なんだよ！！」

志保「工藤くん。」

私が来たとたん、黒羽くんは足早に去っていった。

新一「おい！待て！！」

志保「どうしたの？」

新一「いや、なんでもねー。」

志保「工藤くん、私ちゃんと帰ってくるわ。だから・・・」

そのとたん、私の体は工藤くんの体に包まれた。

志保「ちょ、ちよつと皆見てるわよ。」

新一「別にいいんだよ。」

志保「じゃあ、工藤くん。行ってきます。」

私はできるだけ笑顔でそう言った。

そして、唇が重なった。

新一「いつてらっしやい。」

” 誰そ彼 ” が愛しい人をさらってく19歳
秋

2話：19歳秋・誰そ彼（後書き）

マリーって・・・

自分で考えておきながら納得いきません。

でも、外人さんの名前ってわかりません・・・

なーんか、納得いかない・・・

3話：20歳春・桜（前書き）

日本とイギリスって、季節違う・・・

でも、面倒くさいのでイギリスも日本と同じ季節ということ。

それと、私英語のことはよく・・・というより全く分からないので
外人さんも日本語しゃべってます。

実際には英語をしゃべってると思ってください。

3話：20歳春・桜

志保SIDE)

工藤くん、元気にしてますか？

日本を離れて半年が過ぎ、

私は無事にイギリスの製薬会社に入社しました。
でも……

「宮野志保ってあなたのこと？」

志保「ええ、そうだけど……」

「よかつたー、同年代の子がいて。あつ！私リマ！！よろしくねー。」

志保「よろしく。」

(なんか、園子さんみたい……)

とりあえず私は元気です。

志保「ええ、同じ会社の人で、園子さんみたいな人がいるのよ。」

最初ははつきり言っただけであの人と一緒に仕事なんてできるわけないって思ったけど

知識に関しては以外と凄いのよね。

仕事もちゃんとするし。新しい薬の開発も順調なのよ。

新一「……お前……俺がいなくても元気だな……」

(いつもよりよく話す……)

18歳の春、あの薬を飲んで組織を抜け出して

工藤さんと子供の姿で出会った。そして元の姿に戻り、恋をして。今はいわゆる《遠距離恋愛》というやつで……

志保「久しぶりね」

新一「ん？」

志保「電話。」

新一「ああ、ちょっとある事件に手こずっててよ。やっと今日解決したんだ。」

志保「……腕落ちたんじゃない？」

新一「バーロー。んなわけねーだろ。」

今回の事件は犯人が複数いて大変だったんだよ。

あーそれと、オメエもつすぐ誕生日だろ。なんか欲しいもんあるか？

買って送る。俺、よくわかんねーし。」

志保「別に何もいらさないわよ。」

新一「遠慮すんな。あつ、でも常識の範囲でな？」

志保「じゃあ、考えとくわ。」

もうすぐ私は20歳になる。

志保（欲しいもの……《フサエブランド》の新作のバッグ？《プラダ》の洋服？）

「はあ……」

でも本当は……

本当はプレゼントなんていらさない

会いたい。

リマ「はあ。いいね。志保は・・・」

あたしなんて・・・あたしなんて・・・一生片恋のま
ま終わるのよ・・・!!

一生純潔を守るのよー！うわー。」

志保「何？どうしたのよ。いきなり・・・」

リマ「アランくん・・・」

志保「え？」

リマ「アランくんっていうね、マジシャンがいるの。まだ大学生な
んだけど・・・」

毎朝電車が一緒に毎日会ううちに好きになっちゃった
のよ。」

志保「それなら話しかけてみればいいんじゃない？」

リマ「そんなことできないわよ！！彼はそれなりに有名な人だし

私のことなんか眼中にないのよ。」

志保「・・・そういえば・・・大学生のマジシャンって言ったわよ
ね？」

リマ「うん」

志保「彼に親しいマジシャン仲間とかライバルとかっている？」

リマ「えっと・・・親しいかどうかは知らないけど、

前に同年代の日本人の男の子と一緒にショーに出てた
よ。確か・・・」

.....

.....

志保「ごめんなさい・・・なんか変なことになっちゃって。」
快斗「別に、いいけど。」

その後、リマはアランさんと話しているうちに仲良くなり、アドレスの交換もしていた。
そして、家も近所だというので、一緒に帰っていった。

志保「誕生会なんて、灰原哀の時以来だわ。」
快斗「・・・そっか、誕生日だっけ。何か欲しいものある？」
志保「何もいらわないわよ。手ぶらで来て。それじゃあ、私こっちだから。」

何もいららない。会いたい。

.....

家に着くと、私の携帯が震えた。
携帯を開き、通話ボタンを押すと一番聞きたかった声が聞こえる。
新一「欲しいもの決まったか？」
相手が誰かなんて、聞かなくても分かる。
志保「いらないわ。」
新一「だから、遠慮すん・・・」
志保「そのかわり一回でも余分に電話して。」

プツ。ツーツー。

私は電話を急いで切った。工藤くんの声の聞いたらなぜか胸が熱くなつて、涙が出てきた。

会いたい。会って話したい。触れたい。触れられたい。

恋しい。

.....

ピンポーン

ガチャ

リマ・快斗・アラン「「「HAPPY BIRTHDAY!!」」」

志保「.....」

リマ「あれ？無反応？おーい。」

志保「え、あつ、ありがとう。」

快斗「.....」

リマ「ケーキ買ってきたんだよ！！みんなで食べ.....

どうしたの、志保？」

リマが私の顔を心配そうにのぞきこんでいる。

それもそのはず、私の目から涙が流れているからだ。

リマ「ごめんね、志保。びっくりさせすぎた？」

リマは勘違いしているようだ。リマは何も悪くない。むしろ感謝している。

私はただ、思い出したただけだ。あのときの3人のことを。

「HAPPY BIRTHDAY!! 哀ちゃん!!」

「灰原さん、お誕生日おめでとうございます。」

「今日はケーキもあるのか?」

「もー、元太君ったら、今日は哀ちゃんのお誕生日なんだから

まずはおめでとう、でしょ?」

「はは・・・わりいわりい。灰原、おめでとう。」

私が灰原哀だったとき、少年探偵団の3人がいきなり博士の家に来た。

そのことは本当にうれしかった。

だけど

あの日、工藤くんだけは風邪をひいて、探偵事務所で寝かされていて来なかった。

今の状況があの日にとっくりで、工藤くんはいない、と思い知らされた。

志保「大丈夫よ。なんでもないわ。ちょっと、昔を思い出しただけ。」

RRRRRRRRR・・・RRRRRRR・・・

そのとき、テーブルの上に置かれた志保の携帯が鳴った。画面を見てみるとそこには工藤新一、の文字。

志保「・・・工藤くん?」

新一「誕生日おめでとう。わりい、直接言えなくて。」

志保「別に。」

新一「なんだよ。つめてーな。まあいいや。」

とりあえず今から飛行機でイギリス行っから。」

志保「え？」

新一「プレゼントの代わりだよ。明日の朝一でそっちの空港に着くから。」

じゃーな。明日!..!」

プッ・・・

ツーツー

志保（明日・・・）

会える。

.....
快斗SIDE)

新一と志保が離れて暮らすようになって半年。

今日はマジシャン仲間のアランと、アランに惚れているとかいうり
マッて子と

志保を楽しませるような誕生日会をする

・・・つもりだったが、志保はいきなり泣き出した。

最初はうれし泣きかとも思ったけど違った。

『昔を思い出した』

昔っていうのは灰原哀のころか、灰原哀になる前の宮野志保のころのことだろう。

そこで、俺とアランはマジックでもして喜ばせようか、と考えた。そのときアイツから電話がかかってきた。

『工藤くん？』

新一のことは別に嫌いじゃない。大切な友達であり、大切なライバルだ。

だけど、新一と話す志保の顔を見てると辛くなる。

さっきまで泣いていたのに、新一の声を聞いた途端、志保の涙は止まった。

なんだか、イライラする。

せっかく志保のために買ったプレゼントも今日は渡せそうにない。

そう思って、俺は小さな長方形の箱をポケットにしまった。

.....

志保SIDE↓

待ち合わせした場所に来た。

まだ工藤くんは来てない。

私はなぜか落ち着かなくて携帯に表示される時間を見たり、キョロキョロとあちこちと見回したりしていた。

私らしくない、と自分でも思う。

工藤さんと出掛けるといつも事件を呼び込んでいた。もしかしたら今日も彼の周りで事件があっているかもしれない。そんなことを考えていると、自分の名前が呼ばれた。

「志保？」

志保（ドキッ）

新一「よっ！久しぶりだな。」

志保「久しぶりね。元気そうでよかったわ。」

新一「ああ、何？心配だった？」

志保「別に。ただ解毒剤の副作用とか出てないかなって。それより何処行きたいの？」

新一「んー、志保に任せる。俺、イギリスっていったらロンドンに行ったことがあるぐれーで

他はあまり知らねーんだよな。」

志保「じゃあ、とりあえず近くの公園に行く？」

新一「おっ、いいな！」

私達は公園に着くと、ベンチに腰を下ろした。

新一「へえー。けっこういい場所あんだな。」

志保「気に入った？この公園ね、思い出の場所なの。」

新一「思い出？」

志保「昔、家族で何回か来たの。おじいちゃんもおばあちゃんも両親もおねえちゃんもいて……」

楽しい思い出がたくさんあるのよ。

実は、工藤くんがこっちに来たら一度は一緒に来たいと思ってたからよかつ……」

工藤くんは私の言葉を遮り、私の唇を工藤くんの唇が塞いだ。

志保「ちよっ、ちよっど！」

新一「・・・言っていい？」

「会いたかった。」

そう言うと、工藤くんは再び唇を重ねた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

その後も、いろいろなところを見て回った。

小さなハートのついた指輪を買ってくれた。

中学生のお小遣いで買えるほどの安い指輪だったけど、私は内心、
凄くうれしかった。

ただ、横に並んで歩くだけでもうれしかった。

しかし、時間はとまってなんかくれない。

新一「俺、そろそろ・・・」

志保「そうね。」

時計を見ると、もう8時を回っていた。

工藤くんは最終便で日本に帰る。

新一「じゃあ、またな。」

志保「ええ、楽しかったわ。8月のお盆には帰るから。」

新一「おう。待ってる。」

快斗「つけてみてよ。」

私は黒羽くんに言われたとおりそのコームをつけてみた。

志保「どう?」

快斗「いいじゃん。」

志保「ふふ。私もこれ、気に入ったわ。本当にありが・・・」

その瞬間私の頭は黒羽くんの手で支えられ、唇を塞がれた。

快斗「おやすみ。」

黒羽くんはそう、一言だけ言うと帰っていった。

静かな静かな春の夜のことでした

3話：20歳春・桜（後書き）

快斗くん一人称を入れてみました。

快斗くん、まじ快を観てないからどんな人がよくわかりません。

口調とか全然違つかもしれません。
すみません。

4話・20歳夏・月の家（前書き）

軽くR15?あります。

4話：20歳夏・月の家

志保SIDE)

リマ「ねえ、志保。夏は日本に帰るの？」

志保「ええ。約束してるから。」

リマ「快斗くんも？」

志保「さあ、私は何も。」

黒羽君は組織のアジトに乗り込んだとき
一緒に戦った大事な友人で

それなのに

あんなキス

笑い話にもならない。

.....

マリー「じゃあ、気をつけて行ってらっしゃい。」

新一くんにも阿笠さんにも宜しく。」

志保「ええ。行つてきます。」

私は飛行機に乗った。

窓の外を見ると飛行機は雲の上だった。

目をつぶると思ひ出す。

あの日のこと。

不意打ちだったとはいえ、工藤君にどんな顔して会えばいいんだろう。

目を開けると、いつの間にか日本に着いていた。

どれだけの間眠っていたのだろう。

長く長い間のような気がする。

飛行機を降りると、私の目にずっと会いたかった工藤くんが映った。

新「おかえり。」

志保「ただいま。」

工藤くんは私に笑いかける。

でも、そんな笑顔、私にはつらいだけ。

イギリスでのことを何も知らない工藤君に罪悪感しか残らない。

付き合っただばかりの頃、私とジンが男と女の関係だったと工藤君が知ったとき、

彼は凄く怒った。私に怒ったのではなく、ジンに。そして自分に。

私はそこに愛なんてなかった、と言っただけどそんな言葉が通用するわけもなく

無理やり私の唇を奪った。

そして私は見てしまった。

工藤くんの悲しい目を。

そのときから私は工藤くんにあんな顔を二度とさせないようにしよう
と心に決めた。

だからあのことは忘れる。

なのに、なんで……

志保「黒羽、くん……」

新一「あつ、マジかよ。アイツも帰って来てんのか。」

私と工藤くんが見たのは博士の家に入ろうとする黒羽くんだった。

黒羽くんも私達に気づいたようでのんきに手を振っている。

もう忘れたのだろうか。

あの出来事以来、黒羽くんとは会わず、

連絡も取らなかった。

だから、彼も日本に帰ってくるなんて知らなかった。

黒羽くんは私達が来るまで、博士の家の扉を開けて待っていた。

どうやら、合鍵を使って開けたらしい。

新一「よお、。久しぶりだな。できればお前には会いたくなかった
けど。」

黒羽「それはこっちの台詞。よつ、志保。久しぶり。春以来？」

志保「え、ええ。そうね。」

新一「？」

言葉が詰まってしまった。これでは工藤くんが不審に思ってもおか
しくない。

工藤くんは案の定、怪しい、といった顔つきで見てくる。

新一「オメェら、向こうで会ってねーのか？」

ああ、工藤くんが疑問に思ったのはそつちのこと……。よかった……。

快斗「ああ、新一が来た日にたまたま会って、それ以来。

俺もマジジャンの仕事で忙しいし。大学もあるし。」

新一「お前もちゃんと向こうでやってんだな。」

快斗「まあ、一応は。」

黒羽くんはずるい。自分だけ全てを忘れたみたいに普通に私にも工藤くんにも話しかける。

快斗「じゃあ、俺は先に手洗ってくるから

新一と志保は博士に挨拶してきたら？」

新一「お前も先に挨拶くらいしろよ。」

快斗「俺は三日前にしたぜ？俺は志保より早く着いてんの。」

そついえば黒羽くんが持っている荷物は泊りがけにしては小さ過ぎる。

入っているのは財布と携帯くらいだろうか。

というより……

新一「つて、オメエここに泊まんのか？」

黒羽「ああ、そうだけど？三日間ずっとここに泊まらせてもらってた。

母さんも寺井ちゃんも何があるかしらねーけどいないみてーだし？」

新一「そついや、快斗の親もお気楽主義だったよな。」

快斗「ああ。つたく、息子が帰ってきてるってのにどこで何してるだか。

それより志保、早く行ってあげねーと。博士、志保が

来るのすげー楽しみにしてたから。」

そう言うと、黒羽くんは洗面所のあるほうへと向かった。

.....

新 SID E

久しぶりに会った志保はなんだか様子がおかしかった。

快斗のことを睨んだり、俺と話していても目を合わせなかったり。

快斗の行動をいちいち気にして、わざと距離を開けているようにも見えた。

それに、志保が日本にいたときに俺が博士の家に泊まっていたいいかどうか聞いたら

いつも決まって、『自分の家が隣にあるんだから家で寝なさい』って言うてたのに

今日は、自分から泊まってけば？なんて……。

まあ、それは久しぶりに会った志保なりの愛情表現かも知れねーけど……。

イギリスで何かあったのだろうか。

俺の知らないところで……。

それとも俺の考えすぎか？

俺は結局、今までの三日間快斗が使っていた部屋で快斗と二人で寝ることになった。

新「……なんでオメエとふとん並べて寝なきゃならねーんだよ。」

快斗「嫌なら、自分の家に帰れば？俺は止めねーよ。」

俺は、仕方なくふとんに入った。快斗も横で俺に背を向けてふとんに入っている。

新一「オメエさ、志保と向こうで何かあったのか？」

快斗「・・・」

新一「／／／／／つ、（くそ。何言っただ俺）・・・やっぱり！忘れる。」

快斗「・・・志保は新一のことしか見てねーよ。」

新一「知ってる。」

快斗「（イラ・・・）」

新一「けど、いくら俺が探偵でも傍にいねえとわかんねえこともあるし。」

快斗「・・・」

.....

志保SIDE)

志保「（眠れない・・・）」

飛行機で長い間寝ていたため、なかなか寝付けない。気分転換にキッチンに行つて水でも飲むことにした。

キッチンに行つてみると明かりがついているのが見えた。

志保「（博士かしら。）」

快斗「志保？」

志保「黒羽くん・・・まだ起きてたの。」

快斗「ああ、ここんとこ夜型だったから寝れなくて。」

気分転換に水をな。そっちは？」

志保「私も。」

私は水をコップに注ぎ、急いでそれを飲み干した。

志保「じゃあ、おやすみ。」

快斗「志保。」

あまり二人で同じ空間にいたくなくて急いでキッチンを出ようとしたのに

黒羽くん呼び止められた。

快斗「まだ怒ってるの？俺がキスしたこと。」

志保「……。」

快斗「悪かったよ。あれは冗談だから忘れて。」

志保「！！ふざけないで！！冗談でもしていいこと悪いことがある……。」

感情的になった私の肩に何かが触れた。

それは工藤くんの手だった。

志保「くど……。」

新一「お前ら声でかすぎ。寝れねーよ。」

その瞬間、工藤くんの拳が黒羽くんの頬に直撃した。そして、私の腕を掴みどこかへ連れて行くこととする。博士の家を出て、着いたのは工藤くんの家だった。

志保「工藤くん……ごめんなさい。でも、あれは冗談だったって、黒羽くんも……。」

新一「バカかお前は！！隙見せてっからだろ！！！」

私に怒鳴った工藤くんはあの時と同じ悲しい目で、見ていられた。なかった。

新一「わり。分かってんだ。快斗が勝手にやったってことくらい。

お前が悪いわけじゃないことも。けど、イラついてどーしようもねー。

俺の知らないところで他の男がお前に触れたりキスしたり、

そついうの考えるだけでたまんね。

ガキなんだよ、俺は。」

志保「……」

新一「……よし、忘れる。お前ももう忘れる。」

志保「ねえ、工藤くん。」

私は工藤くんを自分に振り向かせ、キスをした。

その後も私は博士の家には帰らず、工藤くんと一緒にベッドに入っ

た。そして、私達は始めて体を重ねあった。

甘い甘いこの夜を

溢れる熱情を

月だけが見てた。

4話：20歳夏・月の家（後書き）

なんか、砂時計の漫画を読みながら書いたので、
キャラが違うかもしれませんが・・・

（どっちかっていうと砂時計のキャラの性格が強い？）

5話：20歳秋・空蝉？（前書き）

サブタイトルの年齢はすべて志保の歳です。
たしか新一たちより一つ年上だったような・・・

5話：20歳秋・空蝉？

新一SIDE)

新一(うー、さみい。朝晩冷えてきたな。)

俺は大学から帰ってきて、すぐに夕飯の材料を買いに出かけた。
今はその帰りだ。

夏が終わり、季節はもう秋だ。

つい最近までスーパーまでの裏道も蝉が鳴いていて騒がしかったが、
今は静まり返っている。

志保がイギリスで暮らすようになってから、

自分と博士の分の夕飯は俺が作るようになった。

志保が博士の家を出て行くまでは料理など、ほとんど作ったことが
なく、

最初のうちは包丁もまともに使えず、料理が出来上がるころには
調理開始から3時間も経っていたりした。

しかし、博士の健康を第一に考えていた志保を思い、

大学の授業がどんなに遅くなっても、警察に呼ばれても、
外食はせず、志保が置いていったレシピを見ながら毎日、時間をか
けて作っていた。

新一(今日は秋刀魚だな。ふつうに塩焼きでいっか。)

そんなことを考えながら薄暗い道を歩いていると
男の声が聞こえてきた。

男「だから！友達からでいって言ってんだろ！！」

新一（告白かー？ったく、近所に丸聞こえたっつもの。もうちょっと場所考えろよな。

相手の子もあんな告白でOKなんてするはずな、い・
・って、蘭！？

おいおい、またかよ。モテる女もつらいな。）

男はジーンズを腰で履き、上には派手なTシャツ。

さらに金髪、耳には多くのピアス、と見た目からしてガラの悪い男だった。

蘭「……っ、だから！迷惑なんです。こうやって待ち伏せされるのも！！」

男「けど、お前いつも俺を避けて言う暇ねーから！」

蘭「そういうのもやめてくださいってはっきり言ったでしょう！？」

後なんてつけてこないでください。あまりしつこいと警察

呼びますよ！！」

男「っ、人が下手に出てりゃこの女！！」

ガシッ

蘭「きゃっ」

男は蘭の態度に腹を立てたらしく、蘭の腕を引っ張った。

蘭「離して！！」

新一「乱暴はよくないんじゃないですか？」

最初は話に入るつもりはなかったが、このままでは男が手を出しか

ねないので

俺はあわてて男の手を蘭の腕から振りほどいた。

案の定、男は俺を睨みつける。

男「誰だよ。お前。」

新一「コイツの幼馴染ですよ。俺、多少警察と面識あるんですけど、まだコイツに関わるつもりなら知り合いの刑事呼びますよ?」

俺が、そういうと男は大きく舌打ちをして去っていった。

新一「ガラ悪い……。つーか、あんな奴、蘭の一蹴りでどうにかなるだろ?」

蘭「そ、そうだけど……。ごめんね、新一。助かった。」

新一「……大丈夫か?」

俺の問いに蘭は無言でうなづく。

なんだか、蘭がおかしい。

いつもならあんな男くらい、俺が助けなくても蘭ならどうにかできたはず。

それに、表情も暗い。何か思いつめたような、そんな顔だ。

新一「家に帰る途中だったんだろ?もう暗いし送る。」

そう言って、俺たちは並んで歩いた。

蘭「懐かしいね。こうして並んでると高校時代に戻ったみたい。あつ!」

蘭は何かを見つけたようで、一本の木に近寄っていく。

新一「何？ああ、蝉の抜け殻か。

まだ残ってるのかよ。もう夏は終わったぞ。

中身はとっくに死んでんのに皮だけ。しぶといな。」

蘭「ふふっ。子供のころ一緒に蝉採りしたよね。

新一は子供のくせに『んな、ガキみたいなことできっかよ』
って言ってたけど

結構、楽しんでたし。

それで、新一が採った蝉を家に持って帰ったら、一日中鳴
き続けて

『うるさいから、逃がしなさい』ってお母さんに怒られて。
でも、私は私に似てるって思ったの。」

新一（蝉???)

蘭「ほら、新一も知ってるように、うちって、両親あまり仲よくな
いじゃない？

お互いに愛があるっていうのは分かるけど、

よく夫婦喧嘩してたから、家族で会話することがなかった

の。

家中静かで息が詰まりそうだった。

だから私がしゃべり続けたの。

蝉みたいに一日中。

何年もギーギー、一人でしゃべり続けたの。

何かが変わると思ってた。私が変わられるんだと思ってた。

でも・・・私、もう限界。

私は何のためにあの家にいるんだろう・・・」

新一「蘭・・・」

蘭「・・・っ」

新一「オイ！」

蘭「・・・ごめんね。送ってくれてありがとう。」

蘭は涙声で俺に礼を言うと、走っていく。
そんな蘭を見て、俺は蘭を呼び止める。

新一「あー、あれだ！しばらく博士んちにいるよ。

博士も俺以外に家に来ることがないから寂しがってるし、

夕飯も、俺じゃうまいの作れねーし。」

蘭「・・・うん。」

あれから、俺は蘭を連れて博士ん家に帰った。

博士は久しぶりに蘭と会えてうれしそうだ。

うまい夕飯も食べれたし、今日蘭をつれてきてよかったと思う。

蘭も落ち着いたようで、博士と笑顔で話している。

夕飯を食べ終え、皿の片付けは蘭と俺でやる。

新一「なあ、蘭。」

蘭「何？」

新一「本堂瑛佑って、覚えてるか？」

蘭「うん。瑛佑くんがどうかしたの？」

新一「ああ、今アイツ、アメリカから帰ってきてる。

しばらくは日本にいるそうだけ？」

蘭「そつか。」

新一「会いたくねーか？アイツは蘭に会いたがってる。」

蘭「うん、私も久しぶりに会いたい。」

新一「でき、俺が勝手に人のことべらべらしゃべるのはよくないけ

ど・・・

本堂、オメエのこと好きみたいだぜ？高校の時から。」

江戸川コナンのころ、アイツに言われた。

蘭に告白していいのかどうか。

あの時は蘭のことが好きで、ダメだ、と答えたが、

今の蘭を救えるのは本堂だと思う。

都合のいい話だが。

新一「本堂は蘭のこと、本気で想ってる。アイツなら蘭を幸せにしてくれると思うぜ。」

少し頼りないところもあるかもしんねーけど。

な？本堂に会って、ちゃんと考えてやって。」

蘭「うん・・・」

.....

志保SIDE↓

私は夏のあの出来事以来、黒羽くんと顔をあわせていない。

黒羽くんを嫌いになつたわけじゃない。

ただ、なんとなく顔をあわせづらいただけ。

リマ「しーほ。大丈夫？元気ないけど。」

志保「え？そんなことないけど。」

リマ「じゃあ、考え事してたでしょ？あ！快斗くんのことだ！」

リマには全部話した。

私と工藤くんが幼児化したこと。
私が組織のメンバーだったこと。
両親は私が子供のころになくなったこと。
お姉ちゃんが組織に殺されたこと。
組織を潰したこと。

そして、あの日の黒羽くんとの出来事もすべて。

リマは私の話に口をはさまずに聞いてくれた。

そして、私の話を聞き終わった後、彼女はこう言った。

「うれしい」と。

私はリマにあまり自分のことを話したことがなかったから
私がちゃんと話したことがうれしかったらしい。

過去をすべて話した私にリマはよく相談に乗ってくれる。

特に私から相談を持ちかけることはないが、
私の表情を見て、私が思っていることについてのアドバイスをくれる。

私はそんな彼女に本当に感謝している。

リマ「そりゃ、いきなりキスされて？しかも『冗談』って言われて？

彼氏にばれて？喧嘩して？ってなったら

許せないかもしれないけど、快斗くんのお気持ちもわか

るよ、少しだけ。」

志保「黒羽くんのお気持ち？」

リマ「うん。快斗くん、『冗談』ってことにしたいんだと思う。」

だって、『冗談』でそういうことする人じゃないんでしょ？

『本気』だったらTHE ENDだもんね。

志保と志保の彼氏ほどじゃないけど、志保と快斗くん
も同じ戦場で戦った

運命共同体じゃん？

その関係が壊れるのが怖いんじゃない？」

志保「……」

リマ「あと、志保のお姉さんの話を聞いて思ったんだけど、

快斗さんと明美さんってなんとなく似てない？」

志保「似てないわよ！」

私はリマのその言葉に必死で否定する。

リマ「姿形じゃなくて、印象がだよ？」

志保「似てな……」

リマ「志保を大事に思ってることとか、影で志保を支えるところとか？

私は明美さんのことも快斗くんのことそんな知らないから

はつきりとは言えないんだけどね。」

志保「似て、ないわ。」

確かに、初めて黒羽くんと出会ったとき誰かに似てると思ったけど、

・

ピンポン

AM7:00

おばあちゃんは昔からの友人と旅行に行っているし

今日は仕事が休みなのでいつもより遅めにおきるつもりだったが、

家に響き渡るインターホンの音で目が覚めた。

志保（こんな朝早くに誰かしら……。）

少し警戒しながら玄関のドアを開けると、そこには黒羽くんがいた。そして、私は場違いな黒羽くんの言葉に驚いた。

快斗「遊園地行かない？」

志保「は？」

快斗「仕事休みだろ？俺も大学も仕事も休みだから行こーよ。」

志保「何考えてるのかしら？」

こんな早くにいきなり訪ねてきて……
行くわけないでしょ？」

快斗「嫌ならいいや。じゃあね。」

黒羽くんは私に背を向け、ゆっくり帰っていった。
そのとき、リマが言った言葉を思い出した。

『似てない？』

志保「黒羽くん……！！待って！！行くから！！！」

快斗「やった！」

黒羽くんは満面の笑みを私に向けた。

何がそんなにうれしいのだろう……。

たまたま黒羽くんの行動は理解できない。

蘭SIDE)

私は新一に言われたように瑛佑くんに出会った。

そして、瑛佑くんのこと、ちゃんと考えて答えをだした。

今は瑛佑くんと付き合っている。

今日は高校のクラスメートの何人かで集まって地域のお祭りにきた。

私は瑛佑くんといういろんな店をまわった。

ここのところ、あまり気分が晴れなかったから

このお祭りは気分転換にいい。

でも、やっぱり心にポツカリあいた穴はふさがらない。

このとき、私も瑛佑くんも、新一も、だれも気付かなかった。

私たちが睨むような視線が私たちに向いていたことに。

瑛佑「蘭さん、大丈夫ですか？」

蘭「うん、大丈夫。それにしてもこのお祭り、すごいね!!」

私は瑛佑くんにうその笑顔を見せた。

瑛佑「・・・一つ聞いていいですか？」

蘭「ん？」

瑛佑「どうして、僕と付き合いおうと思ったんですか？」

正直、・・・そこまで好かれてるとは思えません。

怒らないので教えてください。」

蘭「・・・今まで、自分が信じてた、夢見てた世界や現実が泡のようになっちゃって

抜け殻みたいに自分が空っぽになっちゃって・・・
だから、誰か私をしつかり捕まえていてくれる人がほしく
って・・・」

瑛佑「それは、僕の役目ですか？

なんとなく、見てたら分かります。

蘭さん、本当はまだ工藤さんのこと・・・」

ゴッ

ドサ

瑛佑くんの言葉が続かなくなったと思ったら、鈍い音がした。
目の前には太い木の棒を持ったこの間の男。

その男の手が私に伸びてきて腕を引っ張られる。

誰もいないところについたかと思うと、私の体は地面に叩きつけら
れた。

蘭「やめて・・・っ！放して！！」

男「うるせえっ！！」

どんなにもがいても男が私を地面に押さえつけて身動きがとれない。

いつもいつもいつもいつも孤独で

一人で

現実なんてでたらめばかりで

儂くて

信じられるものなんてもう何もないって思ってた

今、目の前の君以外には

目の前の男は苦しそうにうずくまっている。
新一が助けてくれた。

新一「大丈夫か？」

私は、新一に抱きついた。
やっぱり、私はこの場所が一番心が安らぐ。

「しん、いち……」

- - - - -
- - - - -

志保SIDE↓

黒羽くんと私は遊園地の閉園時間ぎりぎりまでアトラクションに乗っていた。

遊園地に行った帰りにコンビニで黒羽くんが花火を買い家の近くの川原ですることになった。

志保「そういえば今年は花火、してなかったわね。よかった、今日できて。」

快斗「花火好き？」

志保「嫌いじゃないわ。」

快斗「そっか。」

志保「あっ、消えた。コンビニで売れ残ってたものだから湿気てるのかしら？」

あ……ろうそくの火まで。」

私が珍しくこんなにしやべるのは何でだろう。

真っ暗な空間に私たち2人きりだから？

暗いのが怖いから？

黒羽くんがどこかお姉ちゃんに似ていて安心して会話できるから？

快斗「志保、灯りつけずに、そのまま聞いて。」

――オレ、志保のことずっと好きだった。

多分、初めて会ったときからずっと。

本当はずっと言いたくて言いたくて言いたくて言いたくて言いたくて

遊園地より、花火より

本当はそれが言いたくて、今日志保の家に行ったんだ。

今日、付き合ってくれてサンキューな。

すっげー楽しかった。」

涙がでた。まるで、黒羽くんがここからいなくなるような言い方を
するから。

快斗「――あと、それから、キスごめんな。いやな想いさせるつ
もりなんてなかったんだけど。」

魔がさした。

じゃあ、行くわオレ。」

『快斗くんと明美さんってなんとなく似てない？』

志保「く、黒羽くん！」

快斗「ん？どうした？」

志保「お願いだから、一人で無茶だけはしないで。」

快斗「無茶なんてしないよ。」

・・・オレは大丈夫だから。」

黒羽くんは少し困ったような笑顔を残して帰っていった。

黒羽くんが私たちの前から姿を消したのは

それからすぐのこと

6話：20歳秋・空蝉〜？

志保SIDE〜

知らせは突然舞い込んだ

志保「……え？『いなくなった』って誰が？」

蘭「だから、快斗！！」

黒羽くんが……いない？

蘭「何週間か前から大学にも行ってないらしくて、家にも帰ってないらしいの。」

快斗の友達のアランくんっていう人が快斗のお母さんに連絡してきたんだけど……

こっちでも大騒ぎになってるの。志保ちゃん、心当たりない！？」

蘭さんのあの電話から2週間が経った。

それでも黒羽くんは見つからず、

一度なんだかんだ気にして、工藤くんがイギリスにやって来た。

新一「何考えてんだろうな……アイツ。」

日本では大騒ぎだぜ。誘拐説まで飛び出して。

だいたいアイツは昔っからわけわかんねーというか、めんどくせーというか

とにかくアイツに関わるとロクなことがねーんだよ！

！」

工藤くんはそういうけど、私は心配でたまらない。

そんな私を気にしてか、彼は私に安心させるように言う。

新一「大丈夫だ。快斗は神出鬼没の元怪盗キッドだぜ？

また、いつもみたいに何事もなかったようにして帰ってくる。」

-. -. -. お姉ちゃんは大丈夫だから-. -. -.

「大丈夫」

私はこの言葉をおまじないにしてた頃がある。

この日、工藤くと私は黒羽くんを探し続けた。

でもそう簡単に見つかるわけもなく

日が傾いてきたころ、2人でおばあちゃんの家に向かう。

家が見えてきたところで、家の門の前に人影が見えた。

インターホンを押そうとしていたその人に私は声をかけた

志保「どちら様？」

私が尋ねると目の前の人は私の方を向いた。

その人は日本人のようで、黒く、長い髪をしている。少し？いや、かなり蘭さんに似ている。

「あ、私、この家の人に用があつて. . .」

この家には私とおばあちゃんしか住んでいない。

私はこの人のことは知らないからおばあちゃんの知り合いだろうか。

志保「ここは私の祖母の家だけど、おばあちゃんに用かしら？」

「あ、いえ．．．宮野志保さんに．．．」

志保「宮野志保は私だけど。何かあるみたいだし家、どうぞ。」

見ず知らずの人を家に気安く入れるのはためらわれたが

外は日も暮れて冷えてきたし、工藤くんもいるから心配ないと思い家に招きいれた。

リビングのソファに向き合って座った。

私の横には工藤くん。

おばあちゃんが3人分の紅茶を入れて持ってきてくれた。

志保「で？あなたは？」

「あ、私、中森青子っています。」

実は日本からある人を探してここまで来たんですけど．．．

その人があなたと知り合いだって聞いて何か知ってることを聞こうと思つて。」

そこで私と工藤くんは目を合わせた。

この中森、という人の話からすると

探しているのは黒羽くんのことだと予想がついた。

新一「その探している人つて．．．」

青子「黒羽快斗です。知つてますよね？」

快斗、あなたたちのことよく話してたから。

私、彼とは幼馴染なの。快斗が転校してからもよく会

ってた。」

新一「オレのことも話してたって、余計なこと言ってるんじゃないかねーだろうな？アイツ。」

青子「工藤くんのは、正直で真つすぐで『かなわない』って言うってた。」

うらやましかつたんじゃないかな。」

新一「まさか！ありえねえ。」

中森さんは、紅茶を一口飲み、目線を戻した。

青子「・・・快斗、宮野さんのこと好きだったでしょ？

付き合い長いからわかっちゃった！結構顔にでるんだ
！。」

新・志「……………」

青子「あれでも昔は素直でかわいかったんだよ。

でも、おとうさんが亡くなったあとくらいから

快斗、変わっちゃった。

無理もないよね。

尊敬してた大好きなおとうさんが亡くなったんだから。

周りには心配かけないように明るく接してたけど

やっぱりどこかで無理してた。

それから、宮野さんや工藤くんに出会って、最近はず
当に楽しかったみたい。

なのに……………」

懐かしむように穏やかな顔して話していた中森さんの顔がだんだん
涙でぬれていく。

青子「快斗に、快斗に何かあったらどうしよう。」

取り返しのつかないことになったら・・・!」

志保「.....」

青子「ねえ。なんで止められなかったの!？」

あなた、会ったんでしょ!？快斗と

いなくなる前日に。

なんで止めてくれなかったの!？」

中森さんは私の腕をつかんで、泣き叫ぶ。

あなたにしかできなかったのに、私じゃ無理なのに、と。

新一「やめろ。コイツには関係ない。」

工藤くんがそう言うと、中森さんは少し冷静になってあやまった。

.....

あれから、中森さんには自分たちがイギリスで黒羽くんを探すので中森さんは日本で黒羽くんの帰りを待つように工藤くんが言い、彼女は家を出て、帰っていった。

志保「昔から、工藤くんといるとほっとする。安心する。」

中森さんが帰ったあと、静かになったリビングで私はぼそっとつぶやいたが

工藤くんには聞こえていたようで失礼な言葉を言ってくる。

新一「なんだ？今日はやけに素直だな。」

志保「悪かったわね、いつも素直じゃないかわいげのない女で。」

新一「いや、そこまで言っただろ。」

ほんと、いつもかわいげのない私がこんなに素直に言葉がすらすら出てくるなんて

自分でもおどろいている。

でも、なんでか言いたくなかった。

今言わないといけない気がした。

志保「どんなつらいことも全部忘れられそうな気がするのよ、あなたがいれば。」

すると、工藤くんは私を引き寄せ軽くキスをする。

志保「……でも、そんな簡単には忘れられない。」

新一「志保？」

志保「私、どうしてあの日、お姉ちゃんが殺された日、言えなかったんだろ？」

お姉ちゃんが殺されたのも私を組織から助けるためだったのに、

ありがともごめんなさいも何も言えなかった。」

新一「仕方ねーだろ。あの日あんなことになるなんてわからなかったんだから。」

私は工藤くんを抱きしめられる。だんだんと工藤くんの腕の力が強くなるのがわかる。

志保「私、黒羽くんと会ってたの。黒羽くんがいなくなったのは多分私と会った次の日。」

早朝いきなり訪ねてきて様子がおかしくて。

だから、工藤くんには悪いと思っただけど一日一緒にい

たの。

『好きだった』とも言われた。これが最期みたいな言い方で。

そのときも、私、黒羽くんにも何も言えなかった。

それに、そのあと黒羽くん……」

新一「志保！…混同すんな！落ち着け！！」

快斗はちよつと出かけてるだけだ。今までだってたまにあつただろ？

こつやって勝手にいなくなること。」

志保「でも、」

新一「死ぬわけねーだろ！！」

オレから見たらアイツほど図太い奴もそうそういねー

よ！！

アイツが死ぬわけない！！

大丈夫だ！！」

”大丈夫”

『お姉ちゃんは大丈夫だから』

『オレは大丈夫だよ』

『大丈夫だ』

志保「だって……前にもそう言った。

お姉ちゃんと最後に会った日、お姉ちゃん、自分は大丈夫だからって言った。

でも大丈夫じゃなかった。

お姉ちゃん、死んじゃったじゃない……。

いいかげんなこと言わないで！！」

言っではいけないひと言を言ったという自覚はあったけど
でも頭の中が真っ白でもう何も考えられなくて
そのまま工藤くんの腕を振り払って家を出た。

- - - - -
- - - - -

新一「SIDE」

新一「あ、お前なんで・・・」

志保が家を飛び出したのを追いかけて、玄関の扉を開いたとき
扉の影から蘭がでてきた。

蘭「新一、ごめん。博士に新一がイギリスに快斗くんを探しに行っ
たって聞いたから

私もついてきて一緒に探そうと思って・・・
とりあえず外行く？」

新一「ああ。」

新一「・・・さっきの聞いてた？」

蘭「少しね。大きな声だったから外まで聞こえちゃった。」

新一「オレさ。うぬぼれてたんだ。多分、もう長いことずっと。

どん底のあの地獄の日々からアイツを救ってやれたと
思ってた。

守って、支えて、理解して、大事にしてやって。

工藤くんが今日、日本に帰ると知りながら・・・

角を曲がったところで誰かにぶつかった。

志保「すみません。」

ひと言あやまって再び歩きだそうとしたとき、名前を呼ばれた。

蘭「志保、ちゃん。」

志保「え？どうして、蘭さんが・・・」

蘭「新一が快斗くんを探しにイギリスに来たっていうから、

私もついてきたの。」

志保「そう。」

蘭「新一の見送り行かないの？会わなくていいの？

ひどいよ、志保ちゃん！！」

蘭さんにこんなこと言われたのは初めてでびっくりしてしまった。

でも、確かに蘭さんの言うとおりだ。

それでも、今工藤くんに会うのはできない。

志保「・・・今は、何をどう工藤くんと話していいかわからないから。」

落ち着いたら電話するからって、伝えて。」

蘭「・・・っ、志保ちゃんはするい！」

自分ばかり傷ついたフリをして、ほかの人間は傷ついてないって思ってるの!？」

伝えないから！私っ・・・

私、新一のこと今でも好きだから！！」

昨日のことと、今日見送りに行かなかったことをあやまろうと思って携帯を開くも、それから先は指が動かない。ふと、窓の外を見た。

誰かが郵便受けに何かを入れたのが見え、私は玄関を飛び出した。急いで郵便受けの中を見ると、封筒が一つ。

表には私の名前、そして裏には

『黒羽快斗』の文字。

私は封筒の中身も見ずに無我夢中で走った。

さっきの人影が黒羽くんのものであることを信じて走った。

志保「黒羽くん！黒羽くん！黒羽くん！！」

ここが住宅街だということも忘れて黒羽くん、と叫んだ。

そして、私が見たのは名前を大声で名前を呼ばれて困った顔をした黒羽くんの姿。

彼の姿を見つけると、全身の力が抜け、地面に足をついてしまった。そんな私に黒羽くんはゆっくり歩いてくる。

快斗「志保。」

志保「も、もう会えないかと思った・・・」

お姉ちゃんみたいになるんじゃないかって・・・

一人でどこ行ってたのよ。」

涙が止まらない。怒りと喜びと安心とが混ざった涙。

快斗「わり・・・」

志保「それで、どこにいたのよ。」

快斗「・・・アメリカ。FBIのジョディさんと一緒にだった。」

志保「FBI? どうして!? もしかして組織の残党がいたの?」

快斗「ちがう。志保たちが追ってた組織は確実につぶれた。」

「 だけど、オレが追ってた組織はまだ今でも活動してる。」

志保「でも、今組織はつぶれたって・・・。」

黒羽くんの言っている意味がわからない。

私と工藤くんが追っていたあの組織はつぶれた。

それなら、黒羽くんという組織もつぶれたはず。

一緒に戦ったのだから。

快斗「オレの親父を殺したのはあの組織じゃなかったんだ。」

「 オレは今、その組織をつぶすためにFBIと作戦を立ててる。」

「 一週間後、奴らのアジトに乗り込む予定だ。」

志保「そ、そんな・・・だったら、私も行くわ。」

快斗「誰が連れて行くかよ。」

「 今回の組織は前ほど勢力も大きくないし、あんな組織は作戦通りにいけばすぐつぶれる。」

「 それに、これはオレが終わらせたいんだ。親父を殺した奴らは。」

「 FBIも優秀な人が集まっているから心配ない。」

「 あと、このことは誰にもいうな。手紙にも書いてるけど、」

「 特に新一はそのことを知ったら、自分もついていくっていうに決まってる。」

「 だから、オレが帰ってくるまでは誰にも言うな。」

「 志保「でも! 黒羽くんのお母さんも中森さんも、みんな心配してるのよ!」?」

「 快斗「とにかく言うな。」」

組織がらみの危険なことだから、誰かに言ってその人の命が狙われる可能性もある。

それを避けるために黒羽くんは今まで黙っていたのかもしれない。それに、命を懸けて戦う黒羽くんの邪魔はできない。

だから、私は黒羽くんが帰ってくるまでこの秘密は誰にも言わないようにする、と決めた。

志保「絶対帰ってきて。死なないで。」

快斗「死ぬわけないじゃん。オレは元怪盗キッドだぜ？」

黒羽くんはそう言って、笑った。

工藤くんに似たその笑顔に私の心は少し晴れていった。

それから二週間後、黒羽くんは大怪我を負ったものの命に別状はなく何日か入院して、帰ってきた。

志保「お帰り。」

快斗「ただいま。」

6話：20歳秋・空蝉？（後書き）

これでいいのか！？

いや、だめでしょ・・・

無駄に長い。でも内容はそんなにない。

なんじゃこりゃ。

でも志保の

「だって・・・前にもそう言った。

お姉ちゃんと最後に会った日、お姉ちゃん、自分は大丈夫だからって言った。

でも大丈夫じゃなかった。

お姉ちゃん、死んじやったじゃない・・・。

いいかげんなこと言わないで！！」

の部分が好き。

実際、杏ちゃんがこんな感じのこと言っていて、

これ、志保ちゃんでもいけそうじゃん！と思い、書いてみました。砂時計を新志風にしようと思った理由の一つです。

7話：20歳秋・空蝉？（前書き）

蘭ちゃんのイメージ崩壊・・・

たんだよ。

びっくりだよ。

みんな心配してたのに。」

新一「……」

蘭「……でもあの2人、快斗さんと志保ちゃん。

どうなるかな。結構お似合いだと思っただけど。」

新一「何が言いたんだよ。」

さっきから人がイラつくことばかりわざわざ言いやが

……」

蘭がこんなこと言うなんて珍しい。

オレは蘭の言葉に腹が立って思わずいつもより低い声がでた。

しかし、オレの言葉は最後まで言えなかった。

蘭の唇がオレのと重なっていたから。

蘭「鈍感」

びっくりするオレに蘭はひとこと。

新一「な、なにすんだよ!」

蘭「ねえ何で、志保ちゃんなの?私だって、まだ新一のこと好きなのに。」

新一「え!？」

蘭「ごめんね。私、帰る。」

蘭がリビングの扉を開いて、足を止めた。

蘭「志保ちゃん……」

扉の前には志保がいた。

蘭は何も言わずに出て行き、オレは志保の前に立った。
志保はうつむいたままで目を合わせようとしない。

新一「外、行くか？」

志保は黙ったままだったが、この気まずい空気のまま2人きりはつ
らかったので

オレたちは一旦外に出た。

しかし外に出てみてもこの空気は変わらない。

しばらくは無言の状態が続いた。

その沈黙を破ったのは志保だ。

志保「ごめんなさい。この間、あんなこと言うつもりなかった。

お姉ちゃんのことだって、工藤くんには関係なかった
のに。」

新一「でも、いいかげんなこというなつてのは本音だろ？」

だったら謝る必要ねーよ。」

言い方がきついのは自分でも分かっていた。
でもイライラはおさまらない。

志保「ほかにも言いたいこと、あるんでしょ？」

新一「ああ。けど、言ったらまたカントンに傷つくんだろ。」

志保「言つて。」

新一「・・・向こうで、お前何やってる。快斗と。

隠れてコソコソ・・・

今まで何やってたんだよ。」

志保「工藤くんが気にすることは何もしてないわよ。」

新一「それは、信じてる。けど、オレだって腹立つだろ！

「オレは最近お前が何考えてるか全然わかんねー。」

言い過ぎた。志保の顔が歪むのがわかる。

目につつすらと涙も見える。

これ以上言っではいけない。

なのに、オレはさらにひどいことを言った。

新一「お前がそういう顔すんな。

こっちが責められてる気分になる……。

だから言いたくなかったんだよ。」

志保が自分の感情を出すようになったのはいいことなのに。

志保がオレの前で涙を流すのは俺に心を開いてくれてるからだって思っただけ。

新一「明日、帰るんだろ？」

気持ちの整理ついたら電話する。だからしばらく距離

おこつ。」

志保「……そうね。」

新一「絶対電話するから。」

志保の顔を見ず言った。

話ながら、歩いていたらいつの間にかもう博士の家の前だ。

志保「じゃあね。」

新一「ああ。気いつけて帰れよ。」

志保「ええ。」

あのと、志保はどんな表情をしていたのだろう。後ろを歩く志保を振り返らずオレは自宅に帰った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

志保SIDE↓

” 気持ちの整理ついたら電話する”

” だからしばらく距離おこう”

” 絶対電話するから”

冬が過ぎ、季節が変わっても

工藤くんから電話はかかってこなかった

リマ「志保！お昼食べいこ！

アランくんのね大学の近くにおいしいハンバーガー屋
見つけたの！

アランくんたちとも約束して一緒に食べよって！！」

志保「ええ。」

リマが教えてくれた店に入ったとき、

テーブルにはもうアランくんと黒羽くんが座っていた。

私の横で歩いていたリマはアランくんの姿をみると、
走って行き、2人が座っているとところに座った。

一人一人、自分の食べたいものを注文した。
私は食欲がなくて飲み物だけ。

快斗「・・・昼、そんだけ？」

志保「食欲ないから。」

快斗「志保、最近ろくに食べてないだろ。顔色悪いよ。」

オレのちよつとあげるからちゃんと食え。

へこんでも何か食べてたら何とかなる。

どーせ新一と喧嘩したまんまなんだろ。分かりやすい

な。」

志保「へこんでなんかっ！」

リマとアランくんは私たちを気にせずいちゃついている。

見ているだけで蒸し暑い。

こちらの会話はまったく聞こえてないみたい。

快斗「あのさ、ずっと気になってたんだけど、

喧嘩の原因ってひょっとしてオレなんじゃないの？

オレが『内緒にしる』とか言ったから。

オレ、明日からちよつと休みで日本に帰るからなんだ

ったら

オレから新一に説明して・・・」

志保「黒羽くん、それは違うわ。」

私が勝手だっただけ。誰のことも考えてなかったから。

ほんと、蘭さんの言うとおり。私だけが今まで辛かつ

たように思ってた。

一番辛かったのは工藤くんと蘭さんだったのに。」

『絶対電話する』って言った工藤くんを信じて待つしかない。

- - - - -

工藤くんが電話をかけてこない理由はなんとなくわかる。
気持ちに少しでも迷いがあるうちは、絶対かけてこない。

真っすぐに器用じゃない、

そんな工藤くんだから好きになった。

だから待つしかない。

リマ「まだ、彼氏から連絡ないの？もうだいぶ経つじゃん。」

志保「そうね。」

リマ「フーか志保、なんで自分から電話かけないの？

『距離おこつ』『電話するから』『なんて

自然消滅狙う男の常套句だよ？』

志保「工藤くんは、そんな人じゃないわ。」

リマ「最初はそんなつもりじゃなくても、

今日より明日、明日より明後日・・・

どんどんどんどん受話器が重くなって

そうして『過去』になるんだよ。

それでも黙って待つてるの？」

志保「いいのよ。それで。もし工藤くんがもう別れるって言っても

私はそれを受け入れる。

工藤くんが幸せならそれでいい。」

この間、蘭さんが今でも工藤くんのことを好きだと知った。
蘭さんが工藤くんにご告白してるのも聞いた。

あの時のリビングの様子は分からなかったけど

工藤さんと蘭さんの会話からしてなんとなく予想はつく。

これから工藤さんと蘭さんが付き合うことになっても文句は言えない。

それよりも今まで私を幸せだと思わせてくれた彼に感謝しなければいけない。

だけど、そう言ったとしても電話くらいはくれるはず。

工藤くんはどこまでも真つすぐな人だから。

リマ「志保、バカな女になったら駄目だよ。志保が電話しないなら

」

志保「ちょ、ちょっと!」

リマは机の上にあつた私の携帯を手に取り、どこかに電話をかける。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

新 SIDE

オレは家で推理小説を読んでいた。小説を読んでいるときは何も考えなくてすむ。

今日は大学も休みで、幸い、目暮警部からも連絡は入ってない。せつかくの休みだから家でゆっくりしよう、と思っていたのに

「よう!!!工藤!」

新 (・・・最悪だ・・・)

「なんや、その顔。めっちゃ、嫌そうな顔やんけ。」

新一「あたりめーだろ。何で服部がここにいんだよ！」

平次「何でって、暇やったからやで。」

「つたく、相変わらずなやつだ。」

それより、家に来るとなったら普通は連絡くらいするだろう。

コイツの場合、その普通が通用しないんだが……。

平次「ま、暇やったってゆーのもあるけど、ホンマは工藤の顔が見たなってなー。」

大好きなねーちゃんと喧嘩したまんまでへこんでる工藤の顔をな。」

新一「おめー、んなことならさっさと帰れよ。」

平次「なんや、つれへんやつちゃんー。」

工藤がねーちゃんと喧嘩したって言うから

このオレが悩みを聞いてやるってゆーてんのに。」

新一「ほっとけ。お前に聞いてもらうことはねーよ。」

けど、こんなとき服部が来てくれたのは正直、ありがたい。

この色黒探偵はふざけながらもちゃんと考えてくれる。

新一「なあ、服部。オメエは和葉ちゃんとやばくなったことってあるか？」

喧嘩したり、自信なくなったり……ひでーこと言う

ちまつたりとか。」

平次「なんや、結局聞いてほしいんやん。」

せやなあ、オレと和葉の場合、喧嘩なんていつものことやしな。

で、工藤はねーちゃんにひどいこと言ってもうたわけか。」

”お前がそういう顔すんな。
こっちが責められてる気分になる……。”

新一「……自分で驚いた。

アイツの、弱いとことか不安定なことか全部知ってるつもりで付き合っ……

オレしか救ってやれないとまで思っ……

けど、結局オレが一番ひでーこと言っ……

自分がこんなちっせー奴だとは思っ……

感情がうまくおさえられねー。

またあんな顔させちまいそう……

平次「あのねーちゃん……確か両親が……
明美……ちゅうねーちゃんのねーちゃんも組織の奴に殺されて……

新一「ああ。」

そ……そのことを考えると……胸が痛くなる。

とくに明美さんはオレが……

平次「……まあ、カンタンやないわな……

いくら惚れ……何年……
でも入り込め……部分……

結局、自分を助けて……
レは思っ……

そもそも『人を救っ……

みんな……立派やない……

新一「けど、それでも、どーにかしてやりたくて。」

オレがもつと大人だったら、また違っんじゃないかとか・・・

自分に腹が立って・・・」

平次「せやな。」

服部に自分の思っていることを全部話したら少し楽になった。

口には出せないが、心の中で感謝した。

服部と話した後、オレの携帯が震えた。

・・・宮野志保・・・

画面にはそう表示されている。

出るかどうか迷ったが、服部に『はよ出えや』と言われ、少し考えたら後通話ボタンを押した。

志保の声を聞くのは何ヶ月ぶりだろう、と想着

電話の向こうから聞こえてくるのを待った。

新一「もしもし。」

『あつ！出た！！出たよ、志保！！』

『ちよつと！勝手に何してんのよ。』

『ほらほら、愛しの彼氏』

電話から聞こえてくるのは女性の声。

掛け間違えか？とも思ったが、携帯の画面には宮野志保の文字。

それに相手の方も志保、と言っているものでそれはないだろう。

新一「志保？」

志保『え、ええ。・・・工藤くん？』

新一「ああ。」

志保『ごめんなさい。自分からかけるつもりなかったんだけど・・・』

』

新一「いや、オレの方こそずっとほったらかしで悪かった。」

志保『・・・工藤くん?』

新一「ん?」

志保『ごめ、なさい。会いたい。』

電話越しにでも志保が泣いてるのが分かった。

その声を聞いて、オレはバカだと思った。

なんで、オレは大切な人を泣かせることしかできないんだろう。

新一「今どこ?家?」

志保『え?ええそうだけど。』

平次「工藤!!!イギリスまでの飛行機、今から空港に行けば間に合うで。」

新一「サンキユ。じゃあ、今からすぐ行く。」

志保『いい。こないで。』

新一「えっ」

志保『私が行くから。』

電話は志保が切った。

携帯を耳から離し、頭の中で志保が言った言葉を整理する。

平次「ねーちゃん、なんて?」

新一「今からこつちに来るって。」

平次「なんや、よかつたやん。ほんならちゃんと仲直りしーや。」

新一「ああ。わーってるよ。ありがとな、服部。」

じゃ、オレ空港に行ってくつから!」

平次「あ、おう・・・って、今から行っても半日以上待たんとねーちゃんけーへんで・・・」

オレは服部の言葉を最後まで聞かず、家を飛び出た。

7話：20歳秋・空蝉？（後書き）

平次くん登場！！

今回のできは微妙・・・

なんか、いつも言ってる気がするけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3572y/>

腕時計

2012年1月8日23時50分発行